

日本、とこしえに美しく

2018.11.3

なつかしいうた

誰もが知っている懐かしい歌を作曲家荻久保和明が編曲したもの。荻久保和明は「季節へのまなざしで」注目されるようになった作曲家で、合唱作品が彼の作品の中心をなしている。自然で最初からそう発想されたかのように駆使された対位法がメロディをいかし、多様なハーモニーと色彩感のある編曲となっている。

中国地方の子守唄は「ねんころろ」がオスティナート（通奏低音）として、そして、カノンとして歌われる。それが昇華されていく。南部牛追い唄は愁いに満ちた美しいメロディをオスティナートがさらに哀愁を誘う。やがて、雪が空から舞い落ちてくる。こきりこは主題とバリエーション。景色が移り変わるように歌は進む。そして、狂躁的な祭は遠ざかっていく。五木の子守唄は、しなやかな哀切に満ちたメロディに対位的なバリエーションがほどこされている。

7つの子ども歌

「子どもがうたう歌」あるいは「子どものための歌」を「子ども歌」としてまとめたもの。作曲家によって創作された童謡や唱歌とは違い、人々が口から口へとどうたい伝えてきた伝承歌には、日本古来の旋法の影響が見受けられ、日本人の体にしみこんだ色合いがある。この作品は今や日本の合唱界にはなくてはならない存在となった信長貴富の比較的初期の作品だが、それぞれの歌の持つ素朴な味わいをいかしつつ、コンポジションといってもいい作品となっている。7曲全曲を通して演奏されることは珍しいのかもしれない。

一番はじめは全国の地名や神社仏閣を一から十まで数え上げる手毬歌・お手玉歌。明治時代につくられた軍歌の旋律がもとで、全国に伝播していく過程で旋律や歌詞に様々なバリエーションが生まれた。通りゃんせは江戸時代から全国に普及した遊戯歌。本居長世の補作によって現在広く知られる形となった。江戸の子守歌 日本の子守歌には、子守奉公の娘たちの悲嘆を歌った「守子歌」が多いが、これは母親が我が子のために歌う「子守歌」。陰旋法でも歌われているが、このアレンジは陽旋法によっている。ずいずいずこころばしは指遊び、あるいは鬼決めに使われる歌。歌詞は意味のつながりよりも、語感のつながりとリズム感によって成り立っている。三地方の子守歌は、1931年まで大阪市内に存在した天満青物市場を歌った「天満の市は」、青森県津軽地方の子守歌の「寝ろじゃ寝ろじゃ」、もともと熊本県人吉あたりで歌われていた「五木の子守歌」の3曲を組み合わせてアレンジされている。五木の子守歌は古閑裕がレコード化のため補作したものが広く知られている。子守奉公に出された娘たちの辛く悲しい境遇を歌っている。あんたがたどこさは全国的に歌われている手毬歌。ていんさぐぬ花は沖縄の言葉では鳳仙花の花



のこと。女の子が真紅の花びらで爪をマニキュアのように染めて遊んだという。「ていんさぐの花は爪に染め、親の教えは心に染めなさい。天に群れる星は数えられようが、親のいうこと

は数のように読めるものではない。夜走る船は北極星が目当て、私を産んでくれた親は私が頼り。」と、ものに例えながら子どもを諭す教訓歌である。

ねんね根来の いくつかの手遊びうた

この2曲は1994～95年に松下耕が作曲した「紀の国のこどもうた」の中に収められたものだ。松下が住んでいたハンガリーや北欧諸国などの合唱曲は、民俗性を大切にしているものが多く、日本の合唱曲にも日本固有の音素材に立脚したものがもっと必要ではないのかと考え、作曲された。紀の国とはもちろん紀伊国のことで、現在の和歌山県と三重県の伊勢以南に至る広大な地域を指す。ねんね根来のの根来とは、紀北地方にある寺の名。曲の中でこの地方に伝わる伝説を歌っている。いくつかの手遊びうたにでてくる「おちゃらかほい」は、二人でする手遊びうた。「ほい」でじゃんけんをする。「いちにのさん」は一人で遊ぶ指遊び。「ちーちーこっこへ」は幼児の“かんのむし”を取るために、掌でする動作。「あがり目ががり目」は顔遊び。「まるかいてちゃん」は絵かき歌。

日本、とこしえに美しく 日本古謡による女声三部合唱のためのミサ曲

日本、とこしえに美しく これほど魅力的に名付けられたミサ曲がこれまでにあったらどうか。2018年（今年）2月に初演されたこの曲のタイトルは、川端康成のノーベル文学賞記念講演『美しい日本の私』からの反映であり、また、古より人の心と四季の美しい日本よ永遠に、との作曲者千原英喜の願いが込められている。日本古謡によるミサ曲とはいかにも千原らしいユニークさだが、様式的に西欧の「パロディー・ミサ」に近いといえる。パロディー・ミサとは民謡や流行歌など、人々によく知られた旋律を用いて作曲されたミサ曲。ルネサンス音楽の時代に多く書かれた。この「日本、とこしえに美しく」では、「さくら」「ソーラン節」「箏曲六段」「越天楽」「ふるさと」「君が代」「蛍の光」が用いられており、日本古謡ではないものも含まれているが、時代を超え世代を超えて親しまれている日本の歌という趣旨である。日本と西欧の音の糸を紡ぎ、一枚のタペストリーを織り上げていく。その織りの美しさ、一種の不思議な感覚、醸し出される芳醇さ、歴史的・精神的な深み・・・。

今回の「華なりコンサート」は日本の音素材に光をあてた作品をあえて「なつかしいうた」と題して構成した。そして、サブタイトルでは～日本的なるもの～とタイトルにはないアイデンティティをにじませた。曲の配列もアレンジ色の強いものからコンポジションへと工夫した。日本的なるものがきつと描き出されるだろう。そして、脈々と歌い継がれてきた旋律の中に「なつかしさ」だけでなく、幾千万もの喜びや悲しみが昇華した“祈り”が響くものと確信している。

参考文献及び引用：音楽之友社「なつかしいうた」 カワイ出版「7つの子ども歌」 カワイ出版「紀の国のこどもうた1・2」 パナムジカ出版「日本、とこしえに美しく」